

かぶらぎ ひれさき
鏑木清方と鏨崎英朋 近代文芸を彩る口絵 朝日智雄コレクション

太田記念美術館(東京・原宿) 2021.05.21~06.20 (3月開催の変更)



「鏑木清方」(1878~1972)は、2019年に「築地明石町」が再発見されたことが話題となった日本画家として広く知られているが、1897(明治30)年代後半から1916(大正5)年頃にかけては、文芸雑誌や小説の単行本の口絵の作で活躍をしていた。

清方と人気の双璧をなしていたのが「鏨崎英朋」(1881~1968)で、二人は「月岡芳年」の系譜に連なると共に、同じ美術団体に属した友人同志でもあり、本展覧会では“明治時代の美しい女性たちを描いた口絵の名品”が紹介されている。

1887(明治20)年代後半から1912年(大正初期)にかけて、文芸雑誌や小説の単行本の巻頭には木版による口絵が付され、この物語の世界を華やかに彩る「木版口絵」は、江戸時代から続く「浮世絵版画」の系譜に連なるだけでなく、江戸の技術を遥かに上回る精密な彫や摺りが施されている。

しかしながら、現在の浮世絵研究ではほとんど顧みられることがなく、忘れてたジャンルとなってしまったようである。

本展は、「朝日智雄」氏の収集品から「厳選約110点」が紹介されている。



鏑木清方 菊池幽芳・著《百合子後編》口絵(左)《小ゆき後編》口絵(中)
鏨崎 英朋 泉鏡花 著《続風流線》口絵(右)

泉鏡花の小説『続風流線』の巻頭に付された口絵で、竜巻に襲われて船が転覆し、湖に落ちた美樹子を多見治が救助する場面で、画面一杯に流れる水が描かれ、水の中の二人の体が見えらると見えるという斬新な構図と高度な摺りの技法が兼ね備えられた作品である。